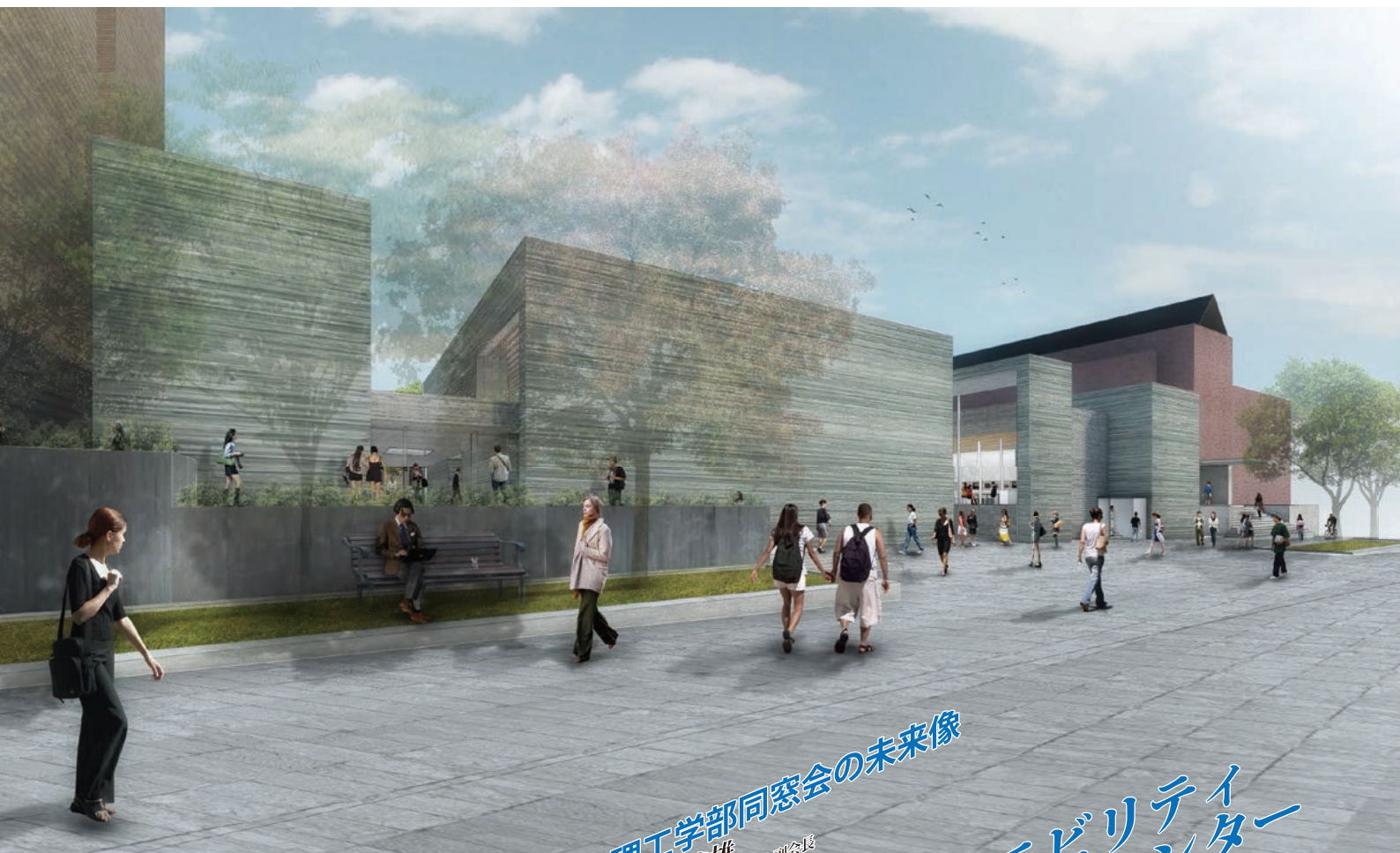


DoKoネット 20

同志社大学理工学部同窓会報

Oct. 2014



理工学部同窓会の未来像
篠木 俊雄
同志社大学理工学部同窓会副会長

理工学部近況報告
林田 明
同志社大学理工学部長
同志社大学大学院理工学研究科長
同志社理工学会会長

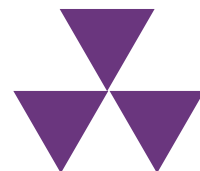
モビリティ
研究センター
について
モビリティ研究センター センター長
佐藤 健哉 (情報システムデザイン学科)



京田辺キャンパス 礼拝堂建設中

日常的に学生達が通行する道を挟んで、キリスト教主義を象徴する場「礼拝堂」と新島襄の精神を受け継ぐ学生の集う場「キリスト教文化センター」が真正面から向き合った 2 棟の建物は宗教施設として、神と人との交わり、会衆同士の交わりがある空間であることから、「神と人との出会い、自分を知る場」をキーコンセプトとするコミュニティスペースとし、開放的な空間となるよう留意しています。
(写真：京田辺施設課提供)

[greetings](#) [specials](#) [departments](#) [what's new](#) [essay](#) [reportage](#)



DOSHISHA UNIV.

理工学部同窓会の未来像



同志社大学理工学部同窓会
副会長
篠木 俊雄

昭和61(1986)年 機械工学科第二学科卒
昭和63(1988)年 大学院<前期課程>修了
三菱電機(株) 先端技術総合研究所

同志社大学理工学部同窓会会員の皆様におかれましては、益々ご清栄のこととお慶び申し上げます。2014年は、同志社で理学教育が開始された同志社ハリス理化学校の開設より124年目になるとともに、旧専門学校から数えて、理工(工)学部創設70周年の節目の年になります。この伝統の中、4万人を超える卒業生が、様々な方面でご活躍されています。「理工学部同窓会」も多くの方々に支えられながら、会員相互の親睦を図るべく、堅実に成長してきております。また、今年2月には、全同志社の卒業生を対象とした「第一回同志社校友会大懇親会」が開催され、全学的な同窓会活動が活発化しております。「理工学部同窓会」は、これまで比較的単独で活動して参りましたが、これからは、校友会や他学部同窓会およびスポーツユニオン等、他のOB/OG組織との交流を図りながら、横方向の連携の在り方も考えていく必要があります。

さて、昨今、世界を取り巻く情勢は、自然災害を含めて混沌としております。これからの国際社会や経済を支えるものは何かと自問したとき、やはり技術を抜きには成立せず、この礎になるのが理工学教育であると考えております。新島先生が同志社大学設立を志されたときは、維新という時代背景もあり、欧米列国に追いつくべく次世代を担う“人”の教育を目指されたと拝察いたします。しかし、現代における各種応用技術の急速な進歩、技術の多様化、社会のグローバル化、そして労働者の高齢化といった状況を考えた場合、卒業された方が、改めて、従来の学科/学部体系の枠に囚われない新しい技術を修得できる“場”が必要で、今後、生涯教育に対するニーズが更に高まってくると推測されます。また一方で、理工学部学生の就活も、近年急速に文系化し、学生と卒業生の強固な繋がりが求められています。この様な時代の変化に対して、本「理工学部同窓会」が、即応して、卒業生と大学との架け橋となり、有機的に機能する組織として体系化が図られればと考えております。

これからも、「理工学部同窓会」の未来像について、幹事の方々と共に、色々思索して参りたいと存じますので、皆様の忌憚なきご意見およびご指導ご鞭撻を頂戴できれば幸甚に存じます。

最後に、「理工学部同窓会」は卒業生の皆様の温かいご支援によって運営されております。引き続き、一人でも多くの方からご理解・ご協力を賜れば幸いです。末筆になりましたが、会員皆様の益々のご健康とご多幸を祈念申し上げます。

ご挨拶



同志社大学理工学部長
同志社大学大学院理工学研究科長
同志社理工学会会長
林田 明

今年3月、理工学部70年史「人間のための科学技術を求めて」—同志社大学理工学部の70年—が刊行されました。1944年の同志社工業専門学校の開校に始まる様々な出来事の記録や工学部・理工学部の発展に尽力された諸先生方の言葉からは、本学の歴史の重みや先達の熱い志が伝わってきます。また、その歴史が、約4万人を数える卒業生の皆さんによって積み重ねられてきたことを感じます。正に70年の歳月は第二次世界大戦の終結から高度経済成長、科学技術の発展の過程と重なるものであり、様々な分野での卒業生の皆さんのご活躍があってこそ今日の理工学部が成り立っていることを実感させられます。

70年前といえば、最近本学を定年退職された何人かの先生がお生まれになった頃に当たります。一方、現在理工学部で学んで

いる学生諸君は、工学部と工学研究科、理工学研究所が京田辺校地に移転した1994年の前後に生まれた世代です。京田辺へ移転後の20年間には、阪神・淡路大震災(1995年)や東日本大震災(2011年)、JR福知山線脱線事故(2005年)などの「想定外」の天災や人災が起こるとともに、様々な地球環境問題が顕在化してきました。さらに、社会の中で科学技術の発展に伴って新しい問題が発生し、改めて科学者・技術者の社会的責任と行動規範の倫理性が問われるようになってきました。このような時代にこそ、「人間のための科学技術」を基本理念とし、理工学の基礎をよく学んで最先端の研究や技術革新に挑戦できる人材、優れた知識や技術を学んで「良心を手腕に運用する人物」を育成することが、ますます重要になると考えられます。

昨年度、文系5学部の教育が今出川に統合されたことにより、京田辺キャンパスの学生数は約16,000人から約9,000人とかなり少なくなりました。それでも、理工学部では多くの学生が熱心に講義や実験に取り組み、いつも研究室が賑わっていることに変わりはありません。新しい礼拝堂や複合的研究施設の建設など、京田辺キャンパスの充実につながる取り組みも進められています。理工学部・理工学研究科の発展と京田辺キャンパスの活性化に向けて、引き続き同窓会会員の皆様のご支援とご助言をいただきますようお願い申し上げます。



「人間のための科学技術を求めて」 —同志社大学理工学部の70年—についてのお知らせ

理工学部70年史編集委員会委員長
加藤 利次

同志社工業専門学校・工学部・理工学部70年史『人間のための科学技術を求めて 同志社大学理工学部の70年』が2014年3月に刊行されました。

3年前の企画委員会で「年史」の企画が立案され、写真や資料を大学内部や卒業生よりできるだけ広く集めることからはじめました。理工学会・同窓会のホームページや同窓会会報「DoKoネット」等で写真や寄稿を募集したところ、多くの方の協力を得ることができ、貴重な写真、ノートや資料等を集めることができました。

本年史は学部の歴史を含めてその過去・現在・未来を伝えるため、3部構成としました。第1部は、今出川・京田辺、新旧の建物、春夏秋冬、講義・学生生活等の様々な視点で貴重な写真を綴っています。第2部は、工業専門学校設立から今日の理工

学部へいたる歴史をまとめています。第3部は、若手教員や在学生による座談会の記録と現在の研究室と研究施設についてまとめています。全体のコンセプトとして、理工学部の70年の歴史への旅を、卒業生や在学生をはじめ将来の学生が読んで楽しめるものとなるように努めました。

ぜひとも多くの皆様のお申し込みをお待ちしております。

冊子版として2,000部、電子ブックとしてCD版5,000部を作成し、電子ブックには、冊子データのみならず、昨年11月の同窓会総会・リユニオンで行われました講演会「洋学者としての新島襄と山本覚馬・八重兄妹」（講師：大越哲仁先生 同志社史資料センター第一部門研究員）の講演資料と動画も取っております。

（同窓会報「DoKoネット」第19号、理工学部70年史編集後記より転載）

無 料

70年史の
入手方法に
ついて

同窓会費を納入された方で70年史を希望される方全員に、冊子またはCDを贈呈させていただく事になりました。同窓会報 DoKo ネット送付の際に同封の同窓会費振込用紙もしくは申込用紙に、その旨をご記入ください。あるいは別途、メール、FAX、郵送でもお申し込みいただけますので、①70年史希望、②郵便番号・住所、③氏名（フリガナ）、④電話番号、⑤卒業年、⑥卒業学科をご記入のうえ、同窓会事務局迄ご連絡下さい。ただし冊子ご希望の方が多く場合には、電子ブック（CD）をお送りさせていただく事をご了承下さい。また、お手元に届くまで時間がかかる場合もありますので、ご了承ください。

同志社大学理工学部同窓会の愛称を公募し、応募のあった愛称について本会幹事会において協議した結果、以下のとおり仮決定しましたのでお知らせします。たくさんのご応募ありがとうございました。

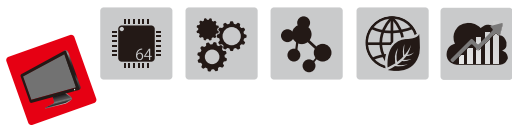
- 愛 称 「理工会」
2014年度の総会（2014年11月1日（土））にて審議させていただきます。
- 決定理由 工学部から理工学部へ名称変更したのには大きな意味があり、「理」を入れたかった。
※工業専門学校の時代より理工学部を創ろうとしていたが、3学科しかないなどの理由で工学部（大学）になってしまった。
採用者への記念品贈呈は発送をもって代えさせていただきます。
- 参 考 応募総数：130件

お問合わせ先
〒610-0321 京都府京田辺市多々羅都谷1-3
同志社大学理工学部同窓会事務局
Tel : 0774-65-6219 Fax : 0774-65-6850
E-mail : dkk@mail.doshisha.ac.jp

同志社大学
理工学部同窓会の
愛称仮決定について

キーワード: 高度情報技術者, 知的照明システム, 社会情報基盤, モビリティ変革

インテリジェント情報工学科 情報システムデザイン学科



情報系として学科が設置され、インテリジェント情報工学科が(前身の知識工学科の時期を含め)20年、情報システムデザイン学科は10年の節目を迎えました。両学科では、世の中で日々発展を遂げるIT分野に対応するため、コンピュータやネットワーク、プログラミングなどの情報工学の基礎から、ロボティクスや情報システム設計などの応用までの教育を通して、幅広い知識と高い専門技術を習得した高度情報技術者の育成を行っています。

就職については、日本の経済環境が好転する状況において、堅調な実績を挙げており、IT業界のみならず金融やマスコミなどの幅広い分野へ、多くの卒業生が羽ばたいていっています。

研究に関して、知的照明システムは東京都内8箇所での実証実験の後、実用化第一号として2013年5月に竣工した三菱地所株式会社茅場町グリーンビルに採用され実利用が始まりました。関係論的システムデザイン研究センターでは、心の豊かさや

“つながり”を実感できる社会情報基盤を実現するための研究開発を進めています。モビリティ研究センターでは、平成26年度私立大学戦略的研究基盤形成支援事業の研究拠点形成に採択され、新たに高齢化社会に向けたモビリティ変革の研究を開始しました。

情報系教員の構成として、音声言語処理機構研究室の西田昌史准教授が2013年3月末に退職されました。

【インテリジェント情報工学科】 情報数理工学研究室(程俊教授, 吉田雅一助教), 情報システム学研究室(金田重郎教授, 芳賀博英教授), 知識情報処理研究室(渡部広一教授, 土屋誠司准教授), 知的機構研究室(坂東敏博准教授), 知的システムデザイン研究室(三木光範教授, 間博人助教), 知能メカトロ情報システム研究室(橋本雅文教授)

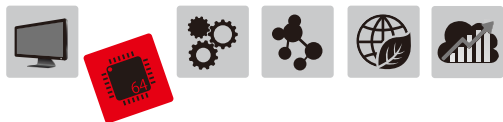
【情報システムデザイン学科】 社会情報学研究室(下原勝憲教授, タネヴィヴァン教授), 知能メカトロ情報システム研究室(高橋和彦教授), 共創情報学研究室(片桐滋教授, 大崎美穂准教授), 応用メディア情報研究室(大久保雅史教授, 土屋隆生教授), ネットワーク情報システム研究室(佐藤健哉教授, 小坂隆浩准教授), 音声言語処理機構研究室(山本誠一教授)。

教務主任 佐藤 健哉

4

キーワード: インフラストラクチャー, パワーエレクトロニクス, 情報通信, 光電子デバイス

電気工学科・電子工学科



電気工学科および電子工学科では、学生の基礎学力の充実のため電気回路学、電気磁気学、数学・物理系工業基礎科目を演習中心に実施しております。1年次春学期の「ゼミ演習」では少人数クラスによる演習クラスを実施するほか、今出川キャンパスを訪れ、電気設備見学会の合間に同志社の歴史に触れる機会をもうけています。また1-3年次の各学期で実験科目を設定しており、低学年では基本計測器の取扱や製作実験テーマを中心に「ものづくり」に親しむカリキュラムを導入しています。そのため、電気系卒業生の基礎学力の高さと実験遂行能力は企業からも評価されており、卒業生の就職状況は変わらず良好です。

3年次秋学期の電気工学実験Ⅱと電子工学実験Ⅱのプレゼミ配属では、研究室体験を通じて卒業研究の一端に触れるとともに、教員や大学院生との交流を深める機会を提供しています。そのため、各学生は自分の将来設計(就職や大学院進学)を3年次の早い段階で意識し、就職活動にも好影響が現れています。

大学院博士前期課程では科学技術英語の必修科目を設置して



雨谷昭弘教授(退職)



江本顕雄准教授(新任)

いるほか、学期毎に各院生の研究進捗を評価するポスター発表会を実施しています。そのため近年は院生の国際ジャーナルへの論文投稿数や国際会議の発表件数が増えてきました。各研究室には国際科学技術コース前期課程の留学生も所属しており、グローバル化が進んでいます。

このような研究・教育を支えるプロジェクトとして、電気系は文部科学省の私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「総合的電力・通信社会環境の形成プロジェクト」(2010年より)に採択されるとともに、博士課程教育プログラム「グローバル・リソース・マネジメント(GRM)」(2012年より)にも参画し、活発な活動を行っています。

電気系教員の動きとしましては、長きに渡り本学に御奉職いただきました電気工学科の雨谷昭弘教授が本年3月末に退職されました。一方、4月より、江本顕雄准教授を光デバイス研究室にお迎えし、新しい体制で研究・教育を進めております。今後も電気系教員一同、研究・教育の質を高めるために邁進したいと存じます。

教務主任 大谷 直毅

キーワード:材料・構造系,熱・流体系,振動・制御・生産系,材料工学に関連する数学・物理系

機械システム工学科 エネルギー機械工学科



本年度も、新一年生として両学科合わせて192名(機械システム118名, エネルギー機械74名)の新生が入学しました。また大学院(理工学研究科機械工学専攻)への進学を志望する学生も多く、2014年度には115名が大学院に入学しました。現在、機械工学専攻の大学院博士課程前期(博士)には2年生と合わせて合計212名が在籍しています。さらに機械工学専攻では、2011年4月から開設された「安全技術者養成コース」において、今年度は46名が履修登録を行い、「リスクマネジメント」、「安全工学」、「安全・安心実習」の三つの講義を受講し、国内外の企業現場でのインターンシップ活動を行う事で「安全・安心」に対する基礎知識を身に付けています。また国際化拠点整備事業(グローバル30)の採択に伴い開設された、英語のみで学位が取得できる「国際科学技術コース(機械工学専攻)」にも、6名の正規学生と、1年未満の短期で研究を目的とする特別学生が1名在籍し、国際的にも活躍できる高度な人材を目指しながら、機械工学



小泉孝之教授(退職)



伊藤彰人准教授(新任)

を学んでいます。

企業からの学生求人状況も順調で、本年度には279名の修了および卒業見込み者数に対して、約1,500件の求人があり、一般企業への就職を希望する学生の就職率は、例年通り実質100%を維持しています。

なお教員の異動に関しては、2014年3月には永年にわたり機械系学科および機械系専攻大学院の教育研究活動の発展に多大に尽力頂きました小泉孝之教授が退職されました。一方で、2014年4月よりエネルギー機械工学科に伊藤彰人准教授が機械系学科の新メンバーとして加わりました。機械系学科の益々の発展が期待されています。

最後になりますが、大学生の就職活動の際や、また学内での教育・研究活動などの多岐にわたり、同窓会の皆様を中心に、関係する企業の方々にも益々のご協力をお願いしております。今後とも何とぞ変わらず、ご支援のほどをよろしくお願い致します。

教務主任 大窪 和也

キーワード: 先端機能性物質, バイオテクノロジー, マテリアル・プロセスデザイン, 人と環境にやさしい化学

機能分子・生命化学科 化学システム創成工学科



化学系2学科(機能分子・生命化学科, 化学システム創成工学科)は、2008年度の改編から7年目を迎え、それぞれ「分子の性質を活用して先端領域を開く一次世代を担う化学のスペシャリストへ」と「化学と化学工学を使いこなして、人と環境にやさしい化学システムの創成を目指す」をモットーに、教育・研究を行っております。両学科にまたがって構成される大学院も、2012年度から理工学研究科応用化学専攻に改編され、本年3月に初めての修了生を輩出したところです。

昨年度の就職率も、学部卒、大学院修了生ともに100%を達成することができております。回復基調にある景気動向をふまれば、今年度は、より学生諸君の希望に沿った就職状況が期待されるのですが、消費税増税の影響など、それほど楽観できる状況にはないと考えております。



加納航治教授(退職)

教員の動きに関しては、長きにわたり本学にご奉職いただきました、機能分子・生命化学科の加納航治教授が本年3月に退職されました。今年度の研究室ならびに教員の構成は以下の通りです。

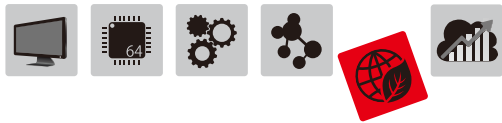
【機能分子・生命化学科】電気化学(稲葉稔教授・土井貴之准教授), 高分子化学(東信行教授・古賀智之教授・松本孝広実験講師), 無機合成化学(廣田健教授・加藤将樹教授), 機能有機化学(北岸宏亮准教授), 物理化学(木村佳文教授・八坂能郎助教), 生体機能化学(水谷義教授), 分子生命化学(小寺政人教授・人見穂教授・大西慶一郎実験講師)。

【化学システム創成工学科】粉体工学(日高重助教授・白川善幸教授・下坂厚子実験講師), 移動現象(森康維教授・土屋活美教授), 材料システム(伊藤正行教授), 生物化学工学(近藤和生教授・松本道明教授), 計測分離工学(塚越一彦教授・橋本雅彦准教授・田村隆実験講師), 分子化学工学(塩井章久教授・山本大吾助教)。

教務主任 加藤 将樹

キーワード:地球環境, 生命環境, 資源・エネルギー, 社会システム

環境システム学科



環境システム学科は2014年4月から11年目に入りました。2014年3月には55名の学生が理学士または工学士として卒業し、そのうちの約3割が本学大学院理工学研究科数理環境科学専攻に進学しました。就職希望の学生には、昨年と同様に就職活動は決して容易ではありませんでしたが、当学科を卒業した学生は男女ともに100%の就職率となりました。一方、2014年2月に行われた大学入試では、環境システム学科は引き続き高い倍率(全学部日程2.9倍, 学部個別日程2.9倍)を維持し、4月の入学式で54名の新生を迎え入れました。

本学科は、自然科学諸分野の横断的な知識をもとに、地球と生命の理解、自然環境の保全、循環型資源・エネルギーシステムの構築などに貢献できる人材の育成を目指しており、1年次に理工学の基礎科目、2～3年次に環境科学と環境工学の専門科目、科学技術論、環境経済学などを学んだ後、4年次の卒業論文へ進むカリキュラムとなっています。

一方、研究では、環境システム学科の教員による研究成果として、同志社大学と(独法)科学技術振興機構は、「革新的金属製造技術:電解採取用陽極の事業化」に関するプレスリリース(<http://www.jst.go.jp/pr/announce/20140904/index.html>)を2014年9月4日に行いました。この技術は同志社大学が米国企業にライセンスした電解採取用陽極が実用化したことによるものです。このような優れた研究成果には、環境システム学科から数理環境科学専攻へ進学した大学院生の活躍が大きく貢献しています。最近では、博士前期課程1年次から国際学会での口頭発表を行う学生も増加しており、博士前期課程に進学した大学院生の就職状況は良好です。

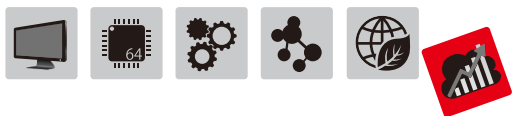
環境システム学科の卒業生は、化学、金属、機械、電気、自動車などのメーカーや商社、環境関連企業、銀行・証券などの金融系企業、公務員や中高教員などの様々な分野で、ますます活躍の場を広げています。今後とも、同窓会会員の皆様のご支援とご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

教務主任 盛満 正嗣



キーワード:数式と記号を駆使する創造力, 豊かな数学力,
未来を切り開く数理学

数理システム学科



数理システム学科は開設より7年目を迎え、本学大学院数理環境科学専攻(博士課程前期課程)数理部門の初修了生を今年3月に送り出しました。就職に関し今年も、これまでと変わらず順調で、メーカー、金融、住宅、不動産、IT、通信、物流販売、アパレル、製菓、放送、教育、旅行代理店関係など、コンピュータ情報処理の企業や、数学教員の職に就くと存じます。

特に、本学大学院数理環境科学専攻(定員25名)には数理部門に13名が入学希望し合格が認められました。来年度も本学大学院入学希望者が多く期待されます。開設後から着実に本学大学院への進学希望者が増加する傾向にあります。その期待に応えられるよう大学院専任教員もそのカリキュラム充実化に努める所存です。

現在学生は、4年次52名、3年次57名、2年次42名、1年次38名が在籍します。毎年10名前後が準備不足で単位取得がかなわずに卒研配属が遅れる模様です。1年次生につき厳しい入学判定を課した結果、若干少なめの入学者となりました。1学年の

学生数40名前後(1研究室5名前後)が卒研指導には効率的な数ですが、教員側の経験的な知見から判断すると、40前後よりも50前後の方がクラスとして活気があり教育的効果はかなり期待される見方が多いのも事実です。この問題点を解消する上、同窓会の皆様におかれましては同志社大学理工学部の先輩として大いに知恵を授けて頂ければと存じます。

今年3月には、三井斌友教授(計算数理)、および岡崎龍太郎准教授(代数学)が退職されました。両先生には学科開設当初からの多大なるご尽力を感謝する次第です。今年4月には河野明教授が復職、また10月より新たに計算数理研究室に今井仁司先生を迎える予定です。この結果、3年生必修科目の数理ゼミナールI・IIは8教員が担当します。Iでは河野、溝畑、押目、齋藤、IIでは津田、囑託講師(京都大学数学専攻)、今井、渡邊の4名ずつです。よって、3年次生には、位相幾何学、代数幾何学、解析学、関数方程式論、統計学、関数解析学、数値解析学、計算機数学から、1年間に4つを選んで学ぶ科目が配当されます。

研究室は新任を含めて、「幾何学」(河野明)、「代数学」(来年度4月着任予定)、「解析学」(押目頼昌)、「関数方程式」(溝畑潔)、「統計ファイナンス」(津田博史)、「情報解析」(齋藤誠慈)、「計算数理」(今井仁司)、「離散数理」(渡邊芳英)の8研究室です。

教務主任 齋藤 誠慈

理工学部・理工学研究科の 国際化推進の取組み について

学部教務主任 土屋 隆生



近年、グローバル人材の育成が取り沙汰されるが、理工学部・理工学研究科は、1998年にフランスの協定校とダブルディグリー(学位同時取得)制度を導入するなど、日本の理工系大学の中でも、国際交流による人材育成については、先駆的存在として取り組んできた。また、本学は「国際主義」を教育理念のひとつに掲げており、それを象徴するように、2009年度に文部科学省の国際化拠点整備事業「大学の国際化のためのネットワーク形成推進事業(グローバル30)」や2012年度には「経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援(Go Global Japan Project)」に採択されている。これらの採択を受けて、理工学部では、学部生の海外留学促進と語学力向上を軸とした、グローバル人材育成の更なる推進に向けた新たな取り組みを行っており、今回は語学力向上に向けたプログラムのひとつを紹介させていただく。

我々は学生に対して、専門分野の知識や技能の習得、あるいは倫理感の養成のみならず、技術者・研究者として自立するための英語力を兼ね備えることを求めている。具体的には、英語の技術報告書や研究論文を調査し、それらを読んで理解し、また成果・報告書を英語で記述する能力である。その能力の向上を目的として、新規科目「Academic English for Science for the 1st grade」を来年度より設置するために、パイロットプログラムという位置づけで2013年度春休みと、2014年度夏休み期間中に短期模擬講座を実施した。このプログラムは、特に学部1年次生に英語の意識改革を与え、以後の学習の中で英語能力向上に向けて、自ら努力する仕組みを作ることを目指している。

2013年度春に開催した講座では、20名の受講生が参加し、英語の論文を書くための基礎事項を4日間にわたり学んだ。学内の掲示やウェブサイトにより受講希望者を募集したところ、わずか2日で定員20名に達し、学生の関心の高さがうかがわれた。受講生は、ネイティブ講師の指



導のもと、英語での文献調査、グループに分かれての簡単な科学実験(サイコロを用いて円周率を求める実験、落下粒子により形成された山の角度を測る実験)、論文原稿の作成、表・図面の描き方、論文原稿の修正、など論文を書く上で必要とされる一連の作業を学んだ。そして、各自が書いた論文原稿を受講生が互いに



共有・指摘しながら修正し合い、また、講師からの英語論文の書き方の手ほどきを受けながら、最後は各自が自力で英語の論文(レポート)を書き上げた。わずか4日間の講座であったが、受講生たちは、

講師との対話形式の講義や、グループディスカッション、互いの英文チェックなど、新たな試みに戸惑いを感じつつも、新鮮で貴重な学びの時間を持つことができたようであり、「論文の書き方を学んだだけでなく、その重要さと面白さに気付いた。」「もっと学びたい!」「留学したい。」との声があった。また、2014年度夏の講座は、より正規科目に近い授業形態を目指し、理工学部の1年次生のみを対象として募集したところ、夏休み期間中の2週にわたる6日間講座という日程にも関わらず、17名の意識の高い学生が参加した。今後は、短期講座での検証結果をもとに、2015年度から新規科目として設置できるよう取り組んでいく所存である。

また、この他にも、留学生との交流や理系の派遣留学プログラム、海外ITインターンシップなど、幅広く様々な取り組みを実施している。卒業生の皆様にも積極的に、ご協力いただければ幸甚であり、この場を借りてお願い申し上げます。

モビリティ研究センター センター長
佐藤 健哉
(情報システムデザイン学科)



モビリティ 研究センター について

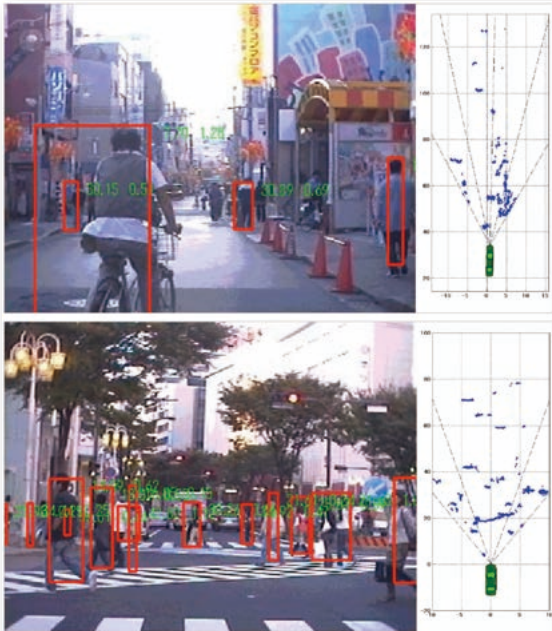


図1) レーダによる方向者等外界センシング

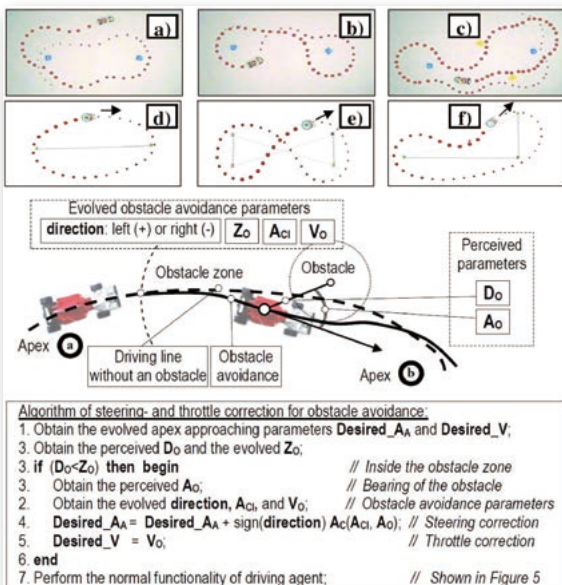


図2) 進化的プログラミングによる運転技術改善

モビリティ研究センターでは、高齢化社会や地方過疎化における移動手段の問題に対してモビリティパラダイムの変革という観点から取り組んでいます。

1. 安全運転支援から自動運転へ

近年、カメラやレーダなどのセンサを車両に搭載し安全運転支援システムが広く普及し始め、加えて、より高度なセンサ技術を利用し高速で高精度な計算を行うことで、ドライバの操作が全く不要な無人でも走行できる自動運転の研究も活発に行われ始めました。しかし、車両に搭載されたセンサからでは、車両から見える範囲は検知できても、もともと見えないところはどうしても見えないため、見通しの悪い交差点における出会い頭の衝突や、物かげからの歩行者の急な飛び出しには対応できません。

これまで、私たち同志社大学モビリティ研究センターでは、見通しの悪い環境においても、複数のセンサを協調して利用することで、車両、自転車、歩行者などの多様な移動物体を高精度で俯瞰的に認識しそれらの動きを予測する手法を研究してきました(図1)。加えて、これらセンサ情報を高速に処理するコンピュータの機構、車両を操作することで運転がうまくっていく人工知能のためのソフトウェア技術(図2)、機能の一部が故障しても継続処理可能な車両の走行アルゴリズム、複数車両と道路インフラの情報交換を通じた安全運転のためのネットワークシステム(図3)、移動体通信のための効率的符号化や秘匿性アルゴリズムに関する研究で多くの成果を上げてきました。また、複数メーカーの車両が相互に通信しデータを交換するためには標準化が必要となりますが、知的交通システム(ITS)分野のネットワークに関する国際標準化にも貢献しています。

2. 高齢化社会への対応

一方で最近では、特に高齢者による運転事故が増加傾向にあり、さらなる超高齢化社会の到来に向け、高齢者が活発に活動できるような安全・安心で、環境にも優しく、快適に移動できる手段が求められるようになってきました。

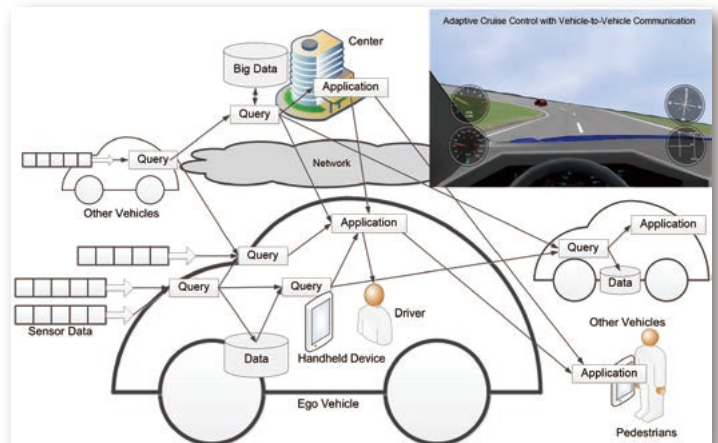


図3) センサデータの効率的分散処理

このような状況において、モビリティ研究センターでは、高齢者を想定したドライバとなるヒト、走行中のクルマ、および、その周辺環境をリアルタイムにセンシングし、人工知能となるコンピュータソフトウェアのエージェント技術においてヒトの動作を予測し周辺環境に適応した車両の運転支援技術を確認することで、これまでの自動運転に関する研究とは異なり、ヒトとクルマの共存および周辺車両や環境との協調を行う進化適応型自動車運転システム「ドライバ・イン・ザ・ループ」の研究(図4)を開始しました。

3. ドライバ・イン・ザ・ループ

「ドライバ・イン・ザ・ループ」とは、自動システムである「ループ」の中にヒトである「ドライバ」を組み込む体系としてのシステムを意味します。一般にドライバであるヒトは個々に身体的機能と運転の嗜好が異なり、特に高齢者では大きな差があります。たとえば、視力が弱くなることに基づく認知能力の低下や、筋力の衰えによる操作能力の低下など、身体的機能の個人的差異が顕著になります。そこで、運転支援のためのソフトウェアエージェントを利用して、運転システムをヒトの特性に適応させる数学的、情報学的な理論を構築し、ドライバごとの特性(低下した認知力、判断力、操作力)を補完することで必要最小限の運転支援を行い高齢者生活の活性化に貢献することを目指しています。

4. 研究プロジェクト

本研究センターでは、平成26年度私立大学戦略的研究基盤形成支援事業に採択され、進化適応型自動車運転システム「ドライバ・イン・ザ・ループ」研究拠点形成を目的に5年間の予定で研究を進めていきます。具体的には、ヒト生体情報の解析技術を駆使し、ヒトの運転特性を把握し、遺伝的アルゴリズム・機械学習を利用して運転システムをソフトウェア的に進化させながら最適解に近づけ、周辺車両の環境認識状況を相互に交換しながら、ヒトと車両の挙動の将来の状態を予測することで、より安全

に車両を制御するアプローチを採ります。周辺状況の認知、判断、操作の遅延問題に対して、物理モデルを使って未来の値を予測する進化型エージェントアルゴリズムに関するこれまでの研究成果に加えて、新たに化学・脳科学・認知科学を融合しヒトを解析する研究成果を融合することで、現在、多方面で行われている無人化可能な自動走行の研究よりもさらにチャレンジングなテーマとなるヒト(ドライバ)の動的特性をシステム内に取り込んだモデルの構築を通して、クルマがヒトに適応することを目指しています。

これらの技術を実現するため、新たな実験環境であるドライビングシミュレータ(図5)および自動運転可能な実験車両(図6)を構築しました。複数台のドライビングシミュレータで相互に連動可能となっており、また、シミュレーション環境内において、自動運転可能な実験車両の走行を模擬できるようになっています。また、シミュレータから実験車両を遠隔操作することも可能となっています。これらの実験環境を用いて「ドライバ・イン・ザ・ループ」の研究を進めていく予定としています。

5. 今後の発展

ドライバそれぞれの特性、嗜好と、リアルタイムの運転状況を考慮した安全運転の実現で、高齢者のみならず女性や若年層を含む一般ドライバの交通事故削減につながります。また、クルマを運転する楽しみを奪うことなく高齢者が安心して運転できることで、外出や遠出が活発となり、公共交通が普及していない地方都市において社会の活性化が可能となります。加えて、若年層の運転者数減少にともなう自動車販売台数減少が問題となっていますが、高齢者の自動車保持数増加により、産業にも好影響を与えることができると予想しています。さらに、ヒトをセンシングしサポートするエージェント技術の確立で、移動を補助する自動車のみならず、将来の介護ロボットなど生活全般を補助するために人間との共存を前提としたロボティクスにおける技術分野の発展にも寄与できると考えています。

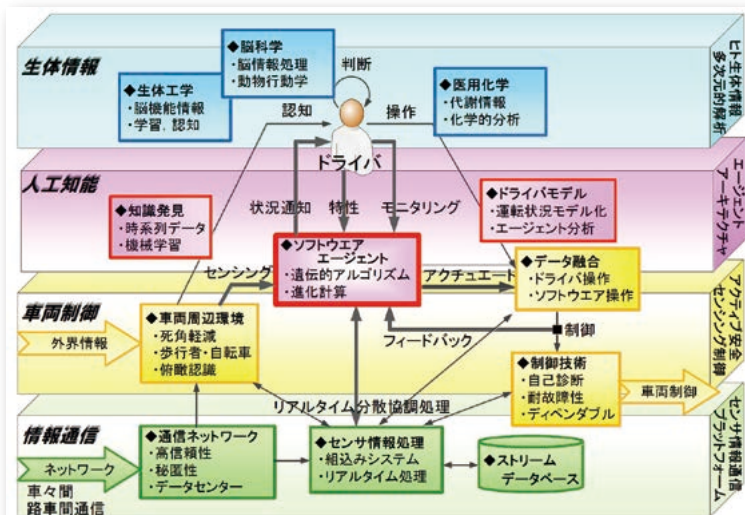


図4) ドライバ・イン・ザ・ループ研究体制



図5) 実験用ドライビングシミュレータ設備

図6) 自動運転実験車両



大学での経験 仕事での経験

東村 貴裕

平成 12(2000)年知識工学科卒
平成 14(2002)年大学院前期修了
パナソニック株式会社

高校生の時に、ある日本の SF 映画を見て人工知能に興味を持ち、知識工学科に入学しました。その映画は人工知能を搭載したロボットと人が最後に心を通わせるシーンがあり、そういう人工知能の仕組みを考えたい、作ってみたいという思いがありました。研究室も、人の考え方、感じ方、知識に基づいた情報処理を研究する研究室に入り、人の感覚に近い単語間の関連性評価の研究を進める中で、ものの考え方、後輩の指導、ソフトウェアの開発など色々なことを教わり、経験しました。

就職し、研究開発を始めて今年で 13 年目になります。入社当時は R&D 部門で新規規格のプロトコル開発や 10 年後の世界を想定したコンセプト検討をおこないました。やはり最初は、仕事の進め方自体や、他部署との連携、商品としてのソフト開発など教わることも多くありました。この時が一番自由な勤務形態で、勤務時間もある程度自由に決められ、コンセプト検討がメインでメンバーとのコミュニケーションをとりながらアイデアを練っていくのが重要な仕事でした。その後、事業部へ異動し、海外向けデジタルテレビのソフト開発に携

わりましたが、自身で放送規格の内容精査、仕様・設計検討、ソフトのコーディングまで行いました。また、現地へ行って放送局との折衝を行ったり、海外の開発メンバーとやり取りして開発を行っていくため、非常に多忙で内容の濃い仕事でした。

現在は、オフィスビルやデパートなどの大規模ビルで使用する次世代照明システムのソフト開発に携わっています。この照明システムでは、照明とセンサーやスイッチの割り付けをソフトウェア上で自由に変更でき、テナントの入れ替わりなどでフロアレイアウトを変更する際でも、工事を伴わずに照明の割り付けを簡単に変更できます。そのため、不要な照明の点灯をしないようにスイッチに対する照明の割り付け変更や、明るさセンサーや人センサーを実際の運用が始まってから使用状況に合わせて調整したり、照明システムのサーバ上で各エリアの照明の使用状況、消費電力量などを管理することができるなど、照明の無駄を省くための機能が盛り込まれています。このような設備機器では、工事現場に入ってシステムの調整作業を行ったり、他社とシステムの連携のため接続検証を行ったりもします。

一つの会社での開発でも、商品の分野が異なると、当然、求められる性能も仕事の進め方も全く異なったものになります。大学での研究内容は特殊性が高く、今までの仕事で役立っているとは言い難いですが、研究を進める中で経験したことは、仕事の中でも基本的な考え方として役に立っていると実感することがあります。

同志社人としての気概とプライド、チャレンジ精神を胸に



山口 悟郎

昭和 53(1978)年 電気工学科卒
京セラ株式会社 代表取締役社長

このたび大鉢忠名誉教授より丁寧なご依頼があり、「ひとつことエッセイ」に寄稿させていただく機会を賜りました。卒業以来、母校にこれといった恩返しもできず、誠に心苦しい次第ですが、関係者の皆様の理工学部に対する並々ならぬご努力と、与えていただきましたこの機会に心より感謝申し上げます。

私は 1978 年に元木先生にご教授いただき、電気工学科を卒業いたしました。改めて、当時の学生生活を振り返ってみたいと思います。

私は小さい頃からスキーが大好きで、高校に続いて大学でも体育会スキー部に所属し、大変忙しい日々を送っておりました。幸いにも今出川キャンパスに近い祖母の家から通っておりましたので、毎

朝自転車で御所を斜めに突っ切り、雨の日は歩いて通学していました。

5 月の終わり頃から梅雨時にかけて、小雨の御所を歩くと、たくさんのツバメが餌を求めて低空でひらひらりと旋回します。毎年それを見るのがとても楽しみでした。授業のこと、スキー部のことなど、当時の私には多くの

の悩みがありましたが、雨の日に御所に漂う濡れた木々の香りが、何ともいえず心を落ち着かせてくれたのを記憶しています。

シーズンオフの夏場は、午前中の授業が終わると、毎日スキー部の厳しい練習があります。練習を終えて、当時新町にあった体育館やプール(現在の継志館フィットネス)の片隅の BOX(部室)で着替えを済ませ、疲れた体に鞭打って再びキャンパスに向かう、そんな毎日でした。

入学当初、多くの先生方から「工学部を 4 年間で卒業するのはそう



▲アイガー山麓にてスイスのお客様と
(左から 2 人目)



やる気を育てよう!

川辺 勝治

昭和 55 (1980) 年工業化学科卒
昭和 58 (1983) 年大学院前期修了
富山県高岡市立中田小学校 校長

本校の 6 年生は 8 月 5, 6 日の 1 泊 2 日で立山登山をしました。

目的の一つは、自分の力を信じる気持ちを育てることです。登山では、互いに助け合いながら、登頂した達成感を味わうことができます。日頃、学習が苦手という子供も、自分の力で登り切ることによって自分に自信をもつことができるのです。

二つ目の目的は、あきらめない粘り強さを育てることです。立山へ登るのは楽なことではありません。歯を食いしばって登ります。他の人が黙々と歩いているのに、自分だけ「もうだめだ。」と言うわけにはいきません。最後までやり抜く、貴重な体験になります。

さて、私は今まで、いかに子供にやる気を育てるか、を考えてきました。子供には、①夢や志、目標をもつこと、②多少の困難があってもあきらめずに努力することを指導してきました。子供の頃から何かに憧れたり、こんなことをしてみたいという願いをもったりすること、そして困難を乗り越えて「できた!」という喜びを味わうことがとても大切です。将来の職業等につながらなくてよいのです。夢や目標をもって努力した、という経験は必ず自分の人生に生きてきます。

簡単なことではないぞ」と釘を刺されておりました。おまけに体育会にも所属していましたので、大変なプレッシャーを感じておりましたが、厳しいながらも親かな先生方や、友人にも恵まれ、何とか 4 年で卒業することができました。当時、よほど苦しかったのか、今でも時々その頃の夢を見て、うなされることがあります。

今振り返ると、大学での 4 年間、勉強とスキーの両立に一生懸命取り組んだ経験が、その後の社会人生活で様々な困難や課題に直面しても、真正面から向き合い、全力でぶつかっていく原動力を培ってくれたように思います。

決して自慢できるような学生ではありませんでしたが、卒業後は京都セラミック(現京セラ)に入社しました。以来、一貫して半導体を保護し機能させる IC パッケージといわれる京セラの看板製品の営業に携わってまいりました。「電気工学を専攻したのに、なぜ営業をしてきたのですか?」とよく聞かれますが、当時の京セラでは技術はもちろん、営業も総務も多くの社員が理系出身者でした。IC パッケージはほとんど半導体メーカーのカスタムメイドで、電気特性や熱のシミュレーションが重要となるため、学生時代に学んだことが多少は役に立ったと思います。

さて、昨年の NHK 大河ドラマ「八重の桜」を機に、改めて新島襄の



指導する教師や保護者は、①子供に多様な体験をさせること、②常に肯定的な評価を心がけること、③できるだけ子供に任せること、④駄目なことは駄目という確固たる価値観をもってのこと等が大切ではないでしょうか。

人生は「自分探しの旅」だと言われます。感動体験を増やすことによって、子供は自ら目標をもって歩み始めます。そしてもし子供が失敗したとしても、自分の考えたことは間違っていなかった、という意識をもたせたいものです。また、いつか自立していかなければならない子供です。少しでも自分で決める機会を増やし、「他律から自律への道」を歩ませます。そうでないと、大きくなっても大人の意見を聞かないと何もできない子供になってしまいます。しかし、何でも OK では子供の道徳心や倫理観が育ちません。会津の什(じゅう)の掟にあるように、「ならぬことはならぬものです」ということを教えるのも大人の勤めだと思います。

立山登山はまさにやる気を育てる活動です。登山をしたことのある方なら分かると思いますが、登頂したときのすがすがしさや「やった!」という喜びは学校の中ではなかなか味わうことができません。これからも、様々な機会を捉えて、子供のやる気を育てていきたいと考えています。



▲自社工場の生産現場を視察(右端)

関連書物を読み返し、新島のチャレンジ精神に今更ながら感銘を受けました。

「良心の全身に充満したる丈夫の起り来らん事を」

この言葉は、同志社人としての私の誇りとなっています。一方、京セラには、会社をさらに成長発展させていくための

行動指針として、また全従業員が素晴らしい人生を送るための考え方である企業哲学・人生哲学ともいえる「京セラフィロソフィ」というものがあります。その中にある「チャレンジ精神をもつ」は私が最も大切にしている言葉です。学生時代に新島精神に出会う機会に恵まれ、また社会に出てからは京セラで多くの薫陶を受け、現在の私があると思っております。

昨年の 4 月より社長として、約 7 万名の社員の先頭に立って邁進するチャレンジングな日々を送っています。常に同志社人としての気概とプライド、そしてチャレンジ精神を胸に、この先も一歩一歩愚直に歩んでまいりたいと考えています。



学生フォーミュラ大会への思い

中村 成男

昭和 42(1967)年機械工学第二学科卒
元株式会社 堀場製作所
元同志社大学 嘱託講師

学生諸君と一緒に「学生フォーミュラ大会」へ参加してきたが、この経緯と思いを報告する。自動車技術会が主催している全日本学生フォーミュラ大会が今年で 12 年目を迎える。この活動は元米国内ではじまった活動で、学生が自分たちで自動車を作って競争し、ものづくりのたのしさを味わってもらおうとの活動である。第 1 回の参加校は 17 校だったが今年は 84 校と大きく発展している。同志社大学は第 1 回以来続けて参加しているが、第 2 回、3 回と参加校が増加するにつれて順位を下げ、第 3 回は下から数えた方が早い状況であった。このころ私は自技会の委員をしていてこの順位を気にしていたのだが、この結果にがまんができなくなって先生方に、これでは同志社大学としてはずかしいですよと言ったところ、この秋より「プロジェクト科目」という授業がはじまり、ここに、この活動を提案するので指導してほしいと依頼された。それ以来、今年に退職するまで 8 年間この活動をする学生さんと過ごしてきた。当時、彼らの目標は高く、やる気満々ではあったが、活動がバラバラで力が結集できていなかった。まず、アドバイスしたのが組織を明確にしよう、設計は確



実に、スケジュールも管理しようとの当たり前の話からだった。だんだん走る車ができてくるようになってきたのだが、4 回大会ではスピンしてリタイヤ、5 回大会ではコースを間違えてリタイヤと苦労を味わってきた。この活動に参加したメンバは入学早々から 3 次元 CAD を教えられ見よう見まねで勉強して育っていく。特にサスペンションの設計など、むづかしい専門用語を自力で勉強して設計し、試走を繰り返しながらマッチングをとる高度な作業ができるメンバが育ってくる。第 9 回大会では 17 位まで育ってきて、第 10 回大会では何とか一桁の順位を目標に参加した結果、全 82 校中で総合成績 3 位、私学で 1 位の成績を収めた。第 11 回においても総合成績 3 位、私学で 1 位となり強豪校の仲間入りができた。そして、この年の秋には第 43 回東京モーターショーに車両を展示していただき多くの来場者にお披露目できた。続く第 12 回大会は参加校が増加して 96 校となる中、優勝をめざして参加したが 1 位名古屋大学、2 位京都大学、3 位同志社大学で 3 年連続 3 位となった。この間、決して秘策があったわけではなく、今、考えて見ると少しずつ進歩して毎年点数で 50~100 点を増やしてきたことがよかった。また、設計の手法や、OB を含めた DR の励行、スケジュールの管理などがだんだん確立して、上位に上れるようになった。この活動に参加したメンバは、苦しい時期を経験するが結果が出ると苦しかったことを忘れるほど大きい喜びを手にする。そして、その時には、いつのまにか実行力、課題解決力、チームで働く力などが身に付いている。これらは大学の座学では決して得られない力である。プロジェクト科目の名前を「ものづくり・人づくり」としているが、彼らはこの報告会で「良い車ができたと思うが、それよりも自分が育った」と発表してくれているのがうれしい。

12



・ <http://www.jsae.or.jp/formula/jp/> : 自動車技術会 学生フォーミュラ・ホームページ
・ <http://blog.dufp.net/> : 同志社大学フォーミュラ・ホームページ を参照のこと

information

日高重助先生 退職記念祝賀会

日高重助先生が、2015 年 3 月末をもって定年退職されることになりました。

日高先生のご退職にあたり、先生のこれまでのご功績を讃え、また長きにわたる教育ならびに学会活動へのご尽力に感謝申し上げるために、2015 年 5 月 23 日(土) 18:00 ~、京都センチュリーホテルにて、記念祝賀会を開催することとなりました。ご案内は後日させていただきますつもりですが、お問い合わせなどございましたら下記にご連絡ください。



連絡先 白川 善幸
TEL:0774-65-6596
E-mail:
yshiraka@mail.doshisha.ac.jp
発起人一同

粉体工学研究室相和会の 開催案内

同志社大学粉体工学研究室(故三輪茂雄名誉教授、日高重助教授)の同窓会である相和会を下記の通り開催いたします。万障お繰り合わせの上、ご参加いただきますようお願い申し上げます。

開催日時: 2014 年 11 月 22 日(土) 13:00 ~ 17:00

場所: からすま京都ホテル

会費: 10,000 円(予定)

内容

第一部: 相和会総会

第二部: 講演会

(講演者: 日高重助教授, 白川善幸教授, 加納純也 東北大学教授(予定))

第三部: 懇親会

お問い合わせ先・参加申込先: 粉体工学研究室 下坂厚子

(Tel: 0774-65-6648, E-mail: ashimosa@mail.doshisha.ac.jp)

相和会ホームページ: <http://powder.doshisha.ac.jp/souwa/>

発起人: 谷本友秀, 榎本時一, 水口治, 加納純也, 日高重助, 白川善幸, 下坂厚子

1. はじめに

同志社大学では、「地域社会とともに歩む大学」を目指して、2002年5月にリエゾンオフィスを設置し、産業界、行政と連携し、積極的に産官学連携活動を展開してきました。幅広い分野での産官学連携・地域連携を目指し、現在、京田辺（ローム記念館）、今出川（寒梅館）、東大阪（クリエイション・コア東大阪内）、東京（同志社大学東京オフィス内）の4つの拠点で活動しています。総合大学ならではの研究基盤を活かした人文科学・自然科学そして社会科学など、本学が持っている知的財産を有効に活用いただくため、知的財産センターと連携を図りながら産官学連携のワンストップ窓口を目指しています。

2. 研究開発推進機構について

リエゾンオフィスは、知的財産センター、リサーチ・アドミニストレーションセンターとともに、本学の特色を生かした先端的、学際的研究拠点を形成し、研究支援業務を行うために設けられている研究開発推進機構の組織として位置づけられています。

リエゾンオフィスでは、社会のニーズを掘り起こし、新たな産業・技術の創出や社会貢献に結びつく産官学連携の取り組みを推進するため、産官学連携コーディネーターを配置しています。コーディネーターは分野ごとの担当制になっています。

知的財産センターでは、本学における教育・研究成果等の知的財産創出のための支援を行い、知的財産を保護し増強を図るとともに、社会への還元と活用を通じて社会に貢献することを目的として活動を行っています。年間約50件の特許出願を行っています。

加えて、2013年11月に、本学の研究力向上の取り組みとして、研究開発推進のマネジメントを統括的にを行い、研究者がより一層研究活動そのものに専念できる環境を構築するべく、リサーチ・アドミニストレーションセンターが設置されました。リサーチ・アドミニストレーターがリエゾンオフィス、知的財産センターと連携のもと、公的研究資金の獲得支援をはじめとした幅広いサポートを行っています。

3. リエゾンオフィスの活動

リエゾンオフィスでは、技術交流（受託・共同研究、奨学寄付金の受入、公的研究開発事業への申請プロデュース及び管理、技術交流会の企画・運営、研究施設・装置の提供、寄付教育研究プロジェクトの受入）、地域交流（講演会・シンポジウムの開催、地域振興支援）、起業経営支援などに積極的に取り組んでいます。

(1) 受託研究・共同研究等の受入

リエゾンオフィスは、産官学連携の代表例とも言える受託研究や共同研究等の受入窓口となっています。産官学連携コーディネーターが、企業等から技術相談があった時点からワンストップで対応し、“産”と“学”の双方の要望を聞き取り、マッチングを行います。本学では年間200件程度の受託研究・共同研究等を受入れています。

(2) 公的研究資金の獲得

各省庁や配分機関等が募集する公的研究資金を獲得すべく、積極的にアプローチ・プロデュースを行っています。リサーチ・アドミニストレーターと産官学連携コーディネーターが協力して活動しています。

(3) 文系の産官学連携

今出川校地にオフィスを設置して、文系担当の産官学連携コーディネーターを配置し、産官学連携を強化するとともに、「人文社会系産官学連携研究紹介集」を他大学に先駆けて発行し、新たな連携を生みだしてきました。理系だ

けでなく、文系及び文理融合系も含めた全学的な産官学連携活動を展開しています。

(4) 情報発信活動

本学の産官学連携・地域連携活動、起業支援活動などの情報発信のため、リエゾンオフィスニュースレター「LIAISON」を年間3回発行しています。また、メールマガジン、ホームページによる情報提供、マスコミへの情報発信も積極的に行っています。

加えて、イノベーション・ジャパンや新技術説明会などの学外における産官学連携イベント等に積極的に出展、参加しています。さらに、リエゾンフェア（2014年度は1月開催予定）を開催して、講演やポスター展示による研究シーズや研究成果の発信を行っています。

なお、今年度は「自然科学系産官学連携研究紹介集」（研究シーズ集）の改訂版を発行する予定です（2014年12月発行予定）。

(5) 起業支援活動

（独）中小企業基盤整備機構・京都府・京田辺市とともに、京田辺キャンパス内に併設されているインキュベーション施設「D-egg」（同志社大学連携型起業家育成施設）を運営しています。

また、学生に対するベンチャー起業支援も行っています。学生からの起業相談の対応や学生によるビジネスプランコンテストも実施しており、これらの活動は学生にとって重要な課外教育の場となっています。

加えて、本学関係者により設立されたNPO法人同志社大学産官学連携支援ネットワーク（D-Bridge）が主催する「社会起業家養成塾」の運営に協力しています。

さらに、金融機関やベンチャーキャピタルとの連携により、本学の研究成果・シーズを活かしたベンチャー企業や本学教員・学生・卒業生が起業したベンチャー企業等を投資対象とするベンチャーファンドが設けられています。

(6) ネットワークの構築及び強化

産官学連携・地域連携活動、起業支援活動を行うため、地方公共団体をはじめとした各種機関・団体とのネットワークを構築しています。

また、同志社校友会大阪支部産官学部会（LCC）や同部会の分科会である東大阪リエゾン倶楽部（HLC）とも協力しながら産官学連携を推進しています。大学と卒業生の絆が強い本学の特徴を生かし、知的財産と人的ネットワークを基礎として、産業界とのより強固な連携が進むような仕組みを構築しています。本稿掲載を機に理工学部同窓会の皆様とも関係を築くことができると考えております。

技術相談や受託研究・共同研究等、ニュースレターの送付やメールマガジンの配信などのご希望がございましたら、下記までぜひお気軽にご連絡ください。また、本稿とあわせてリエゾンオフィスのホームページもご覧ください。



加納航治先生退職記念事業のご報告

理工学部機能分子・生命化学科 北岸 宏亮

DoKo ネット第 18 号にて案内を掲載させていただきました加納航治先生の退職記念事業につきまして、去る 2014 年 5 月 3 日(土)に記念講演会および記念祝賀会を開催いたしましたので、ご報告させていただきます。

同志社大学寒梅館のハーディホールにて、午後 1 時から開催された記念講演会では、『超分子化学の昨日・今日・明日』と題して、古くから加納先生と同じ学問分野を共に開拓してこられた 2 名の先生方(原田明先生ならびに小宮山眞先生)をお招きし、ご講演していただきました。その後、加納先生からは退職記念講演として、学生時代に自然科学を志すきっかけとなった原点から、どのような経緯を経て現在の研究に至ったのかを、研究の苦労話や懐かしい思い出話などを交えながら、90 分間の学術講演をしていただきました。

午後 6 時からは京都ホテルオークラに場所を移し、退職記念祝賀会を催しました。祝賀会には加納先生の恩師にあたる先生方をはじめ、数多くの大学関係者ならびに卒業生が集まり、盛会のうちに終了いたしました。参加者の皆様には、退職記念誌として加納先生の研究論文御業績および卒業生等からの寄稿文が収録された CD を配布させていただきました。本事業にご賛同いただきました皆様の御厚志に対し、深く御礼申し上げます。

加納先生はご退職に際し、同志社大学京田辺キャンパスに新しく造られた庭園の中に、見事な枝ぶりの梅の木を寄贈されました。校祖新島襄が愛した梅の花を通じて、今後も永きにわたり我々同志社の行く末を暖かく見守っていただけるものと思います。



理工学部化学系の建物至誠館の東側に特甲受電設備が建設される際、そこに植えられていた白梅が移植先で枯れたことを記憶されておられ、退職を記念して植樹を考えられた。同志社(新島襄)と白梅について、新島先生の演詩「真理ハ寒梅ノ似シ、敢テ風雪ヲ侵シテ開ク」にもあるように、寒梅は紅梅ではなく白梅であると強調されていた。



公園の機械工場南側に植樹された白梅と噴水。右の建物は電気系実験実習棟



14

小泉孝之先生退職記念パーティのご報告

理工学部機械システム工学科 辻内 伸好

2014 年 5 月 4 日(日)、午後 1 時から小泉孝之先生の退職記念パーティが、奥様廣子様ご同伴のもとホテルグランヴィア京都で開催されました。当日は 120 名以上の OB・OG の皆様、学内外関係者を含め、総勢約 160 名の方々にご参加いただき、盛会の内に記念パーティを終了することができました。以下概要をご報告させていただきます。

パーティの開始前に別室にて全員で集合写真を撮影し、会場に移動、着席後、辻内の司会でパーティを開始させていただきました。小泉先生ご夫婦には、先生のお好きなアメイジンググレースが流れる中、皆さんの拍手のもとご入場いただきました。その後、小泉先生が三菱電機にお勤めの際のパートナー成田正夫様よりご祝辞を賜り、同志社大学の藤井透先生に乾杯の御発声をお願いして、華やかなパーティが始まりました。なかなか顔を合わせることができない OB・OG の皆さんが、食

事も忘れて小泉先生の回り、各自のテーブルの回りで歓談、記念撮影を楽しんでいたのが印象に残りました。

中盤では、小泉先生のご幼少の頃、三菱電機にお勤めの頃、同志社大学の研究室の歴史などを簡単に纏めた DVD を投影いたしました。OB・OG、学外の方々からのお言葉に、そこら中で笑い声が起こり、小泉先生のお人柄がよく表れておりました。終了後、事前に奥様にお願ひし、小泉先生へのお手紙をいただいておりましたので、代読させていただきました。小泉先生も奥様のご苦労、お気遣いにしみじみされていたのが印象に残っております。

終盤では、OG 二人に記念品と花束の贈呈をお願ひし、小泉先生からご挨拶を頂戴したところ、小泉先生のお顔がより明るく輝いておりました。続いて初代 OB 会長で、岐阜大学工学部の松村雄一教授から中締



めのご挨拶を頂戴し、盛会の内に小泉先生の退職記念パーティを終了することができました。

ご出席頂いた方々、ご協力頂きました関係者の皆様方にお礼を申し上げます。

雨谷先生退職記念祝賀会報告

理工学部電気工学科 長岡 直人・馬場 吉弘



2014年4月29日(昭和の日)に、ホテルグランヴィア京都で、雨谷昭弘先生の定年によるご退職および名誉教授へのご就任をお祝いするパーティーを開催致しました。同志社大学電力系統解析研究室のOB・OGを中心に、約240名の方々がご出席下さいました。開宴とともに、雨谷先生ご夫妻が入場され、雨谷先生のこれまでのご経歴とご業績が紹介されました。雨谷先生は、深い洞察力、素晴らしい語学力、そして明るく温かいお人柄をもって研究、教育、学校および学会運営に従事され

てられました。ご祝辞は、森延孝先生、本田晃先生、櫻又浩様からいただきました。雨谷先生のずば抜けた能力や型破りのご指導法について語られました。参加者の皆様には、雨谷先生の業績集が配られ、またOB・OGの参加者の方々には、雨谷先生が大切に保管されていた卒業論文が、先生から直接各OB・OGに手渡されました。数十年前のご自身の手書きの卒業論文を受け取られた方々は、先生からの思いがけない贈り物に感激していました。最後に、雨谷先生からご退職のご挨拶を賜りました。「過ぎし日は夢のまた夢、忘却の彼方へ去りて七十となる。」前人未踏の業績を挙げられたご自身のこれまでの人生を振り返られたお言葉から、参加者も勇気を得られたと思います。ひと時も歓声が途切れることのない素晴らしい祝賀会となりました。

雨谷先生は、本学の名誉教授および特別客員教授として、また今後数年間は主としてカナダのモントリオール理工科大学の客員教授として、教育と研究を続けられます。

同志社大学 GM会 開催報告

(昭和41(1966)年 同志社大学理工学部電気工学科卒業有志) 中桐 有道

昭和41年(1966年)3月、電気工学科を卒業したその日に、卒業証書を持ったまま、夕方から京都三条河原町の老舗旅館「いろは館」に男ばかり20人ほどが集まり一緒に一夜を明かしました。どういういきさつで、誰が音頭を取って、どういう名目で集まったのかはメンバーの誰も覚えていませんが、それが「GM会」の始まりでありました。そしてメンバーがまた再会するのは20年後でした。

GMというのはGreat Menの略のつもりで付けました。これにはいろんな意味があると思いますが、メンバー各自が好きなように理解すればいいだろうと考えていました。いまやメンバーは71歳前後、すでに二人の物故者(洞君と新川君)を出していますし、さらには、連絡の取れない者も一人(坂本君)います。

現在のメンバーは、西は福岡県、東は東京都、でもほとんどは関西に住んでいます。会の開催地はほとんどが京都、そして岐阜、神戸、熱海、東京でもやってきました。

昨年の会合は、卒業式の日と同様「いろは館」で開催しました。翌日は寒梅館でフランス料理の昼食後解散しました。

今年の5月は、横浜中華街で宿泊宴会、翌日は「はとバス」観光を利用して、スカイツリーに上り、浅草界隈で昼食・散策し、隅田川を下って日の出橋へ、そして東京駅で解散しました。

GM会の皆さんは、それぞれのメンバーの人生をお互いに豊かにしていくものを分け合っているように思います。最後の一人は誰だろう？ 不徳かもしれませんが、考えるだけでも楽しいです。

(連絡先: 090-1540-5235, yiu31010@nifty.com)

記事全文は[こちら](#)をご参照下さい。



七夕会(電気学科 昭和32(1957)年卒)の50年

奥村 八郎



七夕会の前身は卒業後同窓の中で、結婚した学友を祝う為に開いた会で毎年の様に結婚が続きました。10年近くで殆ど結婚したため、集まる機会がなくなりこのままでは集まる事が無くなるのではとの声が

何人から出てきたため、改めて同窓会としてスタートしました。

年一回会う事から「七夕会」と名付け、開催日も7月7日に近い土曜日としました。京都、大阪以外に、徳島観光や長野観光、美浜原発見学や月桂冠大倉記念館見学をしました。卒業50周年には、森淳氏の発案で、卒業50周年記念の植樹(ハンカチの木)をしました。

同志社大学に入学したことが、何かのご縁で、こんにち至るまで毎年語り合えるのは、各自が選んだストーリーのような気がします。

このストーリーの終りには誰にも分かりませんが、元気な姿で一人でも多く、一年でも長く続く事を望んでおります。

記事全文は[こちら](#)をご参照下さい。

**開催
案内**

理工学部 70 年史発行記念講演会 2014 年度理工学部同窓会総会・リユニオンのご案内

2014 年 11 月 1 日(土)京田辺キャンパスにて、同志社クローバー祭にあわせて開催致します。



日 時：2014 年 11 月 1 日(土)京田辺キャンパス

12：00～13：00

同窓会総会(恵道館 201 教室)

13：00～15：00

講演会(恵道館 201 教室)

講演予定者 (株)堀場製作所 代表取締役副会長 石田耕三氏
富山県工業技術センター所長・
富山県ものづくり研究開発センター所長 鳥山素弘氏

15：00～17：00

懇親会(紫苑館食堂) 参加費：1,000 円

2013 年度 理工学部同窓会幹事会記録

- 2013 年 5 月 11 日(土)に第 1 回幹事会を開催し、昨年度の事業・会計報告と今年度の事業計画・予算について審議を行った。
- 2013 年 7 月 13 日(土)に第 2 回幹事会を開催し、DoKo ネット第 18 号および 2013 年度総会・リユニオンについて審議を行った。幹事会終了後、懇親会にて親睦を深めた。
- 2013 年 9 月 1 日(日)に第 3 回幹事会を開催し、DoKo ネット第 18 号および 2013 年度総会・リユニオンの状況報告、決定がなされた。
- 2013 年 10 月 26 日(土)に第 4 回幹事会を開催し、総会の議題について審議を行った。
- 2013 年 12 月 8 日(日)に第 5 回幹事会を開催し、総会・リユニオンの意見交換、DoKo ネット第 19 号について審議を行った。幹事会終了後、懇親会にて親睦を深めた。
- 2014 年 2 月 15 日(土)に第 6 回幹事会を開催し、DoKo ネット第 19 号について審議を行った。

2013 年度 大学、校友会、他学部同窓会との交流記録

(2013 年 4 月～2014 年 3 月)

- ・大学、卒業生団体との懇談会 5/11 今出川校地徳照館会議室
- ・第 1 回学部同窓連合会 6/27 今出川校地寒梅館会議室
- ・志コンテスト 7/7 神学館礼拝堂
- ・第 2 回学部同窓連合会 9/26 クラーク記念館会議室
- ・第 3 回学部同窓連合会 12/2 今出川校地寒梅館会議室
- ・同志社杯「ソニエ」祝勝会 1/25 京都ホテルオークラ
- ・同志社校友会大懇親会 2/15 国立京都国際会館
- ・第 3 回学部同窓連絡会 3/3 今出川校地良心館 429

2013 年度 理工学部同窓会総会・リユニオン報告

日 時 2013 年 11 月 10 日(日) 12 時 30 分～16 時 10 分

場 所 同志社大学今出川キャンパス

<詳細は HP をご参照ください>

理工学部 70 年史発行記念講演会・2014 年度 理工学部同窓会総会・リユニオンのご案内

事務局便り

注目!! 理工学部同窓会補助金を交付いたします。

平成 26 年 7 月 12 日より、会費納入者に限り、OB/OG 会や同期会などでの同窓会に参加者 1 名当り 2,000 円の補助金を交付することとなりました。詳細につきましては、

URL : <http://dokonet.doshisha.ac.jp/douki/> をご参照ください。

「寄付」協力者一覧(平成 26 年 4 月 1 日～8 月末日まで)

このたびは本会への「寄付」についてご協力を賜り厚く御礼申し上げます。同窓会活動に対する会員皆さまの関心の高さと期待を役員一同、真摯に受け止め、更なる充実を図ってまいりたく存じます。今後とも同窓会活動にご協力賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。<寄付者一覧はこちらをご参照ください>

The 2nd Grand Reunion ~ Dear Alma Mater 同志社につどう~ 集まろう同志社卒業生 第二回同志社校友会大懇親会

第二回同志社校友会大懇親会が以下の内容で今年度も開催されます。皆様お誘いあわせのうえ是非ご参加ください。翌日は同志社大学ホームカミングデーも開催されます。詳細につきましては、校友会ホームページ(<http://www.doshisha-alumni.gr.jp/index.html>)をご覧ください。

日 時：2014 年 11 月 8 日(土)

チケット：5,000 円(前売り制 1 部・2 部通し券)

講演会：国立京都国際会館 アネックスホール(受付 15 時/講演会 16 時開始)
<http://www.icckyoto.or.jp/> TEL 075-705-1229

交流会：グランドプリンスホテル京都 プリンズホール(18 時 15 分～19 時 45 分)
<http://www.princehotels.co.jp/kyoto/> TEL 075-712-1111
(両会場とも京都市左京区室ヶ池、地下鉄烏丸線 国際会館駅下車)

プログラム(予定)

講演会受付開始 15 時 00 分
講演会 16 時 00 分～17 時 40 分
交流会 18 時 15 分～19 時 45 分
参加者の方にはオリジナル記念品を進呈します。

主催：同志社校友会
お問い合わせ：同志社校友会事務局
TEL：075-251-4393 FAX：075-253-2171
E-mail：doshisha.alumni@gmail.com

訃報：学部長、学長など要職を歴任され、理工学部にご尽力賜りました原正先生が、去る平成 26 年 9 月 3 日、永眠されました。ここに慎んでご冥福をお祈り申し上げます。

同志社大学ホームページアドレス

<http://www.doshisha.ac.jp/>

同志社大学 理工学会・理工学部同窓会
ホームページアドレス

<http://dokonet.doshisha.ac.jp/>



同志社大学理工学部同窓会会報——DoKo ネット 20 号

2014 年 10 月 1 日 発行

発行者：橋詰源治

〒610-0321 京田辺市多々羅都谷 1-3 同志社大学理工学部内

理工学部同窓会事務局 TEL：0774-65-6219 FAX：0774-65-6850

印刷：大枝印刷株式会社 TEL：06-6381-3395 FAX：06-6318-2000

同志社大学理工学部同窓会へのご質問、ご意見あるいは本冊子「DoKo ネット」へのご投稿をお待ちしております。同窓会事務局までご連絡、ご投稿下さい。なお、DoKo ネットの発送につきましては、大口発送元である株式会社エルネットを発送代行者として発送させていただきました。